１年国語総合「小説の読み方を知ろう」（芥川龍之介「羅生門」「仙人」）

○学習指導案

１　科目　　国語総合（２単位）

２　単元名（教材）　「小説の読み方を知ろう」（芥川龍之介「羅生門」「仙人」）

３　単元の目標

(1) 文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，主題をとらえたりしようとする。（関心・意欲・態度）

(2) 文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，主題をとらえたりする。（読む能力）

(3) 文の組み立て，語句の意味，用法を的確に理解し，自分の表現に役立てる。（知識・理解）

４　単元の指導計画

配当時間	学習活動の概要
１次（２時間）	「羅生門」を読み，初読の感想を書き，場面設定・登場 人物像を読み取る。
２次（４時間）	疑問点を挙げながら読解し，下人の心理の移り変わりを読み 取る。（グループ活動）
３次（１時間）	「羅生門」の主題を考え，文章に書く。（パフォーマンス課題）
４次（1時間）	「仙人」を読み，場面設定・登場人物像を読み取る。（ペア活動・グループ 活動）
５次（２時間） ※本時	「仙人」の主人公の心理について考え，老人の思惑を推測する。（グループ活動）
６次（１時間）	３次の作品を読み直し，「仙人」と比較した上で，「羅生門」の主題について，自分の考えをリライトする。（パフォーマンス課題）

５　本時の展開

	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の観点
導入	**前時の学習内容を振り返り，本時の学習内容を知る。** ・ノートで場面設定を確認する。 ・李と老人の人物像を把握する。	・前時の振り返りノートの一部を，クラス全員に紹介する。 ・ペアで話し合わせ，ノートに記させる。	(2)読む能力 ・ノートの記述の確認 (1)関心・意欲・態度 ・ペア活動・グループ活動の観察
展開	**登場人物の心理を理解する** ・李の心情の変化に着目する。 ・老人が「こじき」のような生活をしているのはなぜか考える。	・ペアで話し合わせ，ノートに記させる。 ・グループで自由に話し合わせ，意見をノートにまとめさせる。	
終結	**本時の学習内容を振り返る。**	・学習の振り返りをノートに書かせ，提出させる。	

６　評価手法

(1) 第３次のパフォーマンス課題

「『羅生門』の主題を考える」（小論文，600字程度）

ルーブリック

観点		評価基準
小説の主題を捉える。（読む能力）	A	「羅生門」の主題について，適切な根拠を挙げて，考えを述べることができる。
	B	「羅生門」の主題について，自分の考えを述べることができる。
	C	「羅生門」の主題について，自分の考えを述べることができない。

(2) 第６次のパフォーマンス課題

「『仙人』と読み比べて，『羅生門』の主題を考える」（小論文，６００字程度）

ルーブリック

観点	評価基準	
１読み比べて主題を捉える。	A	「羅生門」と「仙人」の主題について，比較して述べることができる。
	B	「羅生門」と「仙人」の主題について，それぞれ述べることができる。
	C	「羅生門」または「仙人」の主題について，述べることができない。
２読み比べて，作品の内容や表現の特色を理解する。	A	２編を比較し，内容や表現の特色について，感想を述べることができる。
	B	２編の小説それぞれの内容や表現の特色について，感想を述べることができる。
	C	２編それぞれの内容や表現の特色について，感想を述べることができない。

○授業実践の振り返り

１次から３次までは教科書の教材「羅生門」を使用しました。１次では，ワークシートに従って場面設定・登場人物像を確認した後，各自で段落ごとに「問い」と「答え」を考えました。各自が考えた「問い」と「答え」を指導者がまとめ，２次にクラスで共有しました。続いて，グループワークで下人の心理の変化についてまとめ，３次にクラスで共有しました。その後「羅生門」の主題に関する自分の考えを小論文にまとめました。（パフォーマンス課題）

４次から６次までは，「羅生門」と同年に書かれた芥川龍之介の「仙人」という小説をプリントして使用しました。中国を舞台としていますが，登場人物やストーリー展開が「羅生門」によく似ている作品です。「羅生門」との類似点や相違点についてグループで話し合い，ノートにまとめたあとで、「『仙人』と読み比べて，『羅生門』の主題を考える」という課題を出しました。（パフォーマンス課題）

グループでの意見交換を経て繰り返し書くことにより，考えが明確になる生徒が多いこと，書き方の例を示すのが有効であることが分かりました。

【資料１　生徒作品例（第３次）（Ａ評価）】

「羅生門」には人間の生きることに対しての強い欲がどう変化していくのかが描かれている。

最初，クビにされた下人は盗人になる勇気はなかったが，生きることに対する欲（死にたくはない）はあった。とりあえず今日一日は生きていようとして羅生門の楼に登った。その羅生門には死人が多くいることも何か作者の意図があると思う。

そして羅生門に登ると，これまた生きることにどん欲で「生きるためなら何をしてもいい」とさえ言っている老婆がいる。この老婆に髪を抜かれている女も「生きるため」に蛇を魚といつわって売っていた。この老婆を見て下人は「死んでもいい」と思うほどに悪を憎みだした。これはたぶん「生きること」にどん欲な人間が，自分と同様の人間を憎むという皮肉を言っているのだと思う。

その後，老婆の論理にあっさりと納得した下人は，迷わず生きるための悪事を働いている。したがって，やっぱり人間は自分が一番かわいくて，他人を不幸にしても自分が生きることが大切なんだよ，と作者はせせら笑っているのだ。最初は生死を決めかねていたのに，結局自分さえ生きればいいという利己的な考えに落ち着く，人間の生きる欲に対する考えを書いた小説だと思う。

【資料２　生徒作品例（第６次，資料１のリライト）（ＡＡ評価）】

「羅生門」と「仙人」は同じ作者，同じ時代に執筆された短編小説である。「仙人」も「羅生門」も昔の作品のリメイクであり，作者芥川の手が加えられている。

まず，「羅生門」も「仙人」も大きなテーマは「生きる」だと思う。貧しい人間たちが生についてどんな行動をとっているかが書かれている。さらに，雨が降っていたり，季節が秋の終わりから冬の初め頃であったりと，何かと似ているシチュエーションが多い。

しかし，この二つの小説には違った部分も多く見付けることができる。「羅生門」の下人は仕事をクビにされ，行くあてもなく雨やみを待っていた。それに対して，「仙人」の主人公李小二は鼠を使った芝居でそこそこの金をかせいでいたが，雨で客の入りが悪いので仕方なく雨やみを待っていた。どちらも貧しい様子ではあるが，アテのある李とアテのない下人では「生きる」に対する欲の強さが違うであろう。

そして，一番の違いは周囲の人物である。一見，「羅生門」の老婆と「仙人」の老人（仙人）は似た風ぼうだが，その心中は全く異なっている。老婆は，かなり「生きる」に対する欲が強い。何をしても生きるというこの理論は下人をナットクさせてしまうほど説得力がある。それに対して仙人は，なんと，死がなつかしくなったから人間に化けていたそうだ。これには老婆もビックリであろう。この「生きる」に対する二人の欲の強さと方向性の違いがこの二作の決定的な違いだと思う。

最初，「羅生門」は「生きる」に対しての人間の利己的な欲を皮肉って書かれたもので「人間ってバカだなあ」という作者の自虐が含まれていると思っていた。一方「仙人」では「死」と「生」を対比させて「生」の意味を説いている。「仙人」を読んだあとも「羅生門」に対する考えはあまり変わらないが，この二作品は同じ時代に書かれたこともあいまって２作で一つの作品なのではないだろうか。皮肉を込めた「羅生門」。哀れみをこめた「仙人」どちらを先に読むかで２作の解釈も変わってくると思われる。